

参加者

青木、浅田、秋元、市ノ川、伊東、神前、鈴木、田中、
鳥飼、中島、中野(茂)、並木、松田、三浦、町田、
安田、山岡、遊佐、横関、
ゲスト、古宇田、

BMW RS Club

Oct 3~4, '98

秋の奥飛騨路を心ゆくまで
走った一泊二日の楽しい旅

かわらばん

あたかも春を運ぶ早飛脚のように、日本列島を一気に駆け上がる桜前線とは対照的に、北の方から静かにやって来る紅葉シーズン。どこまでも高く透き通った空の下で、大自然をキャンバスに彩られた極彩色のコントラストの見事さ素晴らしさ。大気の中に我が身をさらし、バイクで走り回る我々にとっては本当に心おどる季節です。一昨年の一泊旅行の際に見惚れた、磐梯吾妻のあの息を飲むような紅葉の見事さが、つい昨日の事のように思い起こされます。

「紅葉(もみじ)」の語源は、自然が色づいた草木の美しい色彩を「もみ出して」いることに由来しているそうで、平安時代には秋に葉が美しく色づく植物すべての総称だったとか。納得の一語です。

暑さを嘆いている内にいつしか木槿(ムクゲ)の花も盛りを過ぎ、今年も楽しみな一泊ツーリングの時を迎えるました。台風の余波で前の週までは雨がちの日々が続き、毎度のことながら一泊の際に気になるのは、まず当日のお天気と昼食場所、そしてその夜の食事のことではないでしょうか道路情報では我々の目指す飛騨路にかけては、安房峠や下呂近辺などの崖崩れが報じられ、安房トンネルが開通したとはいえ、矢張り抜けるような碧空の下で紅葉を求め、BMWの排気音にシビレながら走りたいのが、我々バイク・オジサン一同の人情そして願望というものです。

去年まで随分と多種多様な神様にお願いをして、当日をなんとか晴天にしてもらおうと思いましたが、もう懇意の神様が居なくなりました。そこで今年はグット開き直って、我々メンバーの平素の善行(?)に賭ける事にしました。なんとも危ふやで頼りなげな方法です。

“クソッタレメ”こうなったらどうにでもなりやがれ～てんだ！(それでも一応は女房を前の週には教会に行かせました)。ところが悲観的だった天気は、予想以上に早く回復に向かい、前日の夜には中秋の名月を三日後に控え、見事な月が煌々と輝き始めました。そして当日の朝は「ウッソ～！」と言いたくなるような、そんな見事な快晴の朝を迎え、バイクを外に引き出すと初秋の爽やかな空気の中で、隣の家の金木犀が爽やかな香りを振りまいていました。

長かった秋の長雨から解放されて、高速道路は行楽に向かう車で埋まり、8時の集合時になつても平素はうるさいメンバーも来ません。八王子の料金所で待っている仲間が待ちくたびれてはと思い、私が一足先に「石川PA」を出発しました。市ノ川、中野(茂)、町田そして松田の四氏が待っていて、「もう来ないかと思ったよ～」と言われました。毎度スミマセンですね。

おっかけメンバーも飛んできて、混み合う中央道を9時5分前に最初の休憩地「八ヶ岳PA」へとアクセルを全開しました。天気はますます秋の色を濃くして、周囲の山々の緑を一層引き立てていました。暑さが長かったせいでどうか、山の頂を見上げても今年の紅葉は未だ見られません。

各々がそれなりのスピードで走って、10時を少々回って「八ヶ岳PA」に集まりました。此処でメンバーの秋元さんが登場し、更に鳥飼さんがバイクがオイル漏れとの事で、四輪で待ち総勢20人の顔が揃いました。

松本で高速を降りて給油後、混みあう野麦街道(R158)を、バカを言いながら上高地の方へ向いました。やがて松本電鉄の終点「新島々」を通り、上高地に入る全ての自家用車がバスに乗り換える猿渡(さわんど)も過ぎました。水のしたたり落ちるトンネルを幾つか過ぎると、いかにも上高地に近付いた気分がしてきます。満々と水をたたえた「東電」稻核ダムを右手に見ながら快走を続けました。私とゲストの古宇田さんが二台で後の方から走り、「大田川第二隧道」を抜けると事故が有って、そのまま通り過ぎようと良く見ると、なんと我々の仲間が止まっているではありませんか。上から降りてきたお婆さん(60才とか)と連れの車が、急に道路の反対側に有るチェーン装着場へ右折しようとしたらしく、秋元さんのGSとぶつかってしまいました。山岡さんと車の鳥飼さんに後を託して、我々は先を急ぎました。少し走るともうそこは梓湖に有る奈川渡ダムでした。

上高地の入り口の「釜トンネル」前を左に鋭く上ると、かっては難所だった安房に去年からトンネルが通り、アッと言う間に4,700余メートルを走り抜け平湯に着きました。

こんなに便利なら￥600は納得価格だと話し合いました。空気と緑が本当に爽やかでした。

昼飯はあの美人オカミの居る飛騨国府、宇津江四十八滝に有る「八光苑」に予約が取つて有りました。「この辺りは任せてほしい」という並木さんに先導されて走りだしましたが、走つても走つても着かず、その上にアレ～並木、遊佐、伊東そして古宇田さんが先に行って消えてしまいました。第二グループ先頭の私も店の名前しか覚えてなく、確か誰かが「四十八滝がどうこう」と話していたのを思い出し、近くのスタンドで「恥ずかしながら住所も分からなくて」と聞くと有名な店らしくて、なんと一つ手前の信号に入った処だと言うではありませんか。ヤレヤレ。

やっと辿り着くと我々が最初で未だ誰も来てないとのこと。それでも既に三時を過ぎ腹もすいたので先に始めました。「なる程、噂どおりの美人オカミだね～」とは町田さんの弁です。

